

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

## 日本漂流譚一 1

石井, 民司

---

(出版者 / Publisher)

学齡館

(発行年 / Year)

1892

志摩の人臺灣島に漂流し、清國船に因りて故郷に  
歸る。九月の事なりき。志摩國布施村の船頭小  
平次といふを始め六人の乗組みにて、大阪より各種の荷物を積み入れ、  
志摩國大尾崎といふ所にいたらんとしけるに、同月十五日寅刻（前二時）  
大西風吹き出し、何れともなく吹き流され毎日百里ほさつゝも走り、東  
へくと漂ふ内北の方に當りて、大小の島嶼五六ヶ所に見えたる日も  
數多ありて、五十五日目に干潟の處に吹き付られたり。すでにして風  
は止みたれども、船底深く泥中にはまりたれば、進退手を出すに由なく、  
己心を得ず、遂に此處にて一夜を明すことゝなりぬ。さて曉方になり  
て、日の出の方を眺むれば、空一面に朱をさしたる如くにて、いと凄じき  
景色なり。さて日本にて夜の七つ時分（前四時）と思ふ頃、すでに日の御

第四譚

志摩の人臺灣島に漂流し、清國船に因りて故郷に  
歸る。

頃（前二時）は寶曆七丑年（今より百五十年前）三九月の事なりき。志摩國布施村の船頭小  
平次といふを始め六人の乗組みにて、大阪より各種の荷物を積み入れ、  
志摩國大尾崎といふ所にいたらんとしけるに、同月十五日寅刻（前二時）  
大西風吹き出し、何れともなく吹き流され毎日百里ほさつゝも走り、東  
へくと漂ふ内北の方に當りて、大小の島嶼五六ヶ所に見えたる日も  
數多ありて、五十五日目に干潟の處に吹き付られたり。すでにして風  
は止みたれども、船底深く泥中にはまりたれば、進退手を出すに由なく、  
己心を得ず、遂に此處にて一夜を明すことゝなりぬ。さて曉方になり  
て、日の出の方を眺むれば、空一面に朱をさしたる如くにて、いと凄じき  
景色なり。さて日本にて夜の七つ時分（前四時）と思ふ頃、すでに日の御

影を拜するなれば、夜の明るそいと早き海上なるべし。とかくする内  
又東風れこりて泥中を吹き流され、四五十日の間、一島をも見るそなく  
漂へり。然れども、其間天氣頗る暖かなりければ、乗組一同常に肌ぬぎ  
てのみ明し暮しけり。

かゝりし程に、一日南風起りて、それよりは唯北へくと五六十日は  
ども吹出されけるが、久しく降雨なければ、飲水全く盡きて、廿日計りの  
間は、一滴の水をも飲むこと能はず。困難實に堪へがたかりき。され  
せせんすべあらざれば、僅かに船中に積みおきたりし白糖少しづつ  
を、口中に入れ、それにて喉を潤はしつゝ、辛うじて一命を繋ぎしが、鳥羽  
の者二人は、遂に水に渴して相果てけり。それより悲苦ことも、追り  
て一同只管神佛に祈り、雨を乞ひけれども、俄に驗のあるべくも、見えす  
只朝夕銅器に滴るつゆをなめつゝ、僅に渴を凌ぎし苦みは、中々餘人の

考へ及ぶ所にあらざりけり。

北方に吹流されたる故に、殊の外寒氣つよくなりぬれば、又も一層  
の苦難を重ねたり。さて此處にて月の出を拜みたるに、日本にありて  
見るときと同じ景色なるにぞ、こは必ず日本に近づきじならん、一同  
大に悦び勇みけり。これまで漂流するに百五十日程なるに海上にて  
不思議と思ひしそは、北方へ流れゆくとき或日、長さ三間ほどもある大  
なる鮫、幾千といふ數も知れざるほど、船を取巻き、今にも船は彼等のた  
めに顛覆して、魚腹に葬らるゝならんと危く思はれしとあり。又其後  
南海の中にて、蓮の葉の如きもの生茂りたるが、幅七八尺にて、幾十里と  
もなくつゞきたる處もありき。又一夜海上何處とも折々火の光の飛  
びかふさまを見たるともありき。又海中に、松の木の如きもの、いたく  
繁茂して見えたる處もありき。

かくて一夜をこゝに明し、曉がたになりて、東方遙かに陸地の見えけるにぞ、定めて神佛の加護にて、日本に着せしならんと、いたくよろこびつゝ、帆を上げて近より船は十町ほど沖にかゝりて、船頭水主都て四人端船に乗り移りて上陸し、まづ何よりも一滴の水やあると、砂原をさがし居たるに、異様の扮装したるが、鎗、弓、矢、鐵砲を携へたるもの八人、之を見付けて近づき來り、何をか言ふやうなれども、言語通せずして其の意を得がたし。これにて此地の日本にあらざることを知りぬ。さて此方よりは咽をさすりて、水を求むる仕形をしめすに、彼等は飢ゑたりとや察しけん、懷中より團子を出して與へけり。夫をば返し、尙水を求むる様を示し、漸く合點せしと見え、三十町程つれ行きて、清水のある所を教へたれば、四人は飽まで飲み、二十日餘り渴きにかわきし喉を治はしたる、其時の心地よき、何に喩へんかたもなかりき。

廿日餘にて水を得しばかりなり。百五六十日にて始めて國土と人を見しまゝなり。體力のつかれはなかく、未だ回復の間もなきに、かの八人は、四人のものゝ衣類をはぎとり着替へ入れたる、柳行李をも奪ひとり、まるはたかにして四五町程も連れ行き、鹽燒小屋のやうなるいと見苦しき家の内に押入れたり。さて松火を焚きて之にあたらせ、皮にて作りたる着物を着せけるに、一同甚たさうくの思ひをなせり。されど、唯其の暖かなるをたのみに、暫しこらへてありし程に、食事には粟の團子を出すにぞ、之を食ひ居りしが、八人は海邊に行き、端船を打ち釘金物を取り來りけり。皆々は籠に入れられし小鳥の如き思ひをなし、行末如何なる目に逢はんかと、空怖ろしく案じ煩ふ中、里正村長にもやあらんとおほしきもの四人と、外に農夫體の者二百人程來れるを見るに、何れも頭には小笠又は頭巾をかぶり、皮の衣を着たり。中に就

て里正村長なごは香又は雪踏の如き物をふめり。さて此の里正なごの立合にて、四人に向ひ、何をか問ふ所あるが如くなれども、言語少しも通せざるゆゑ、朱墨にて、日本人と草依にて書き示し、彼等は一方向に讀めざる様子なれば、尙假名を付けて示しけれども、此亦讀み得る様なし。よりて、楷書にて書き示せども、尙讀めざるにぞ、打ち捨ておけるに、彼等一同大に笑ひぬ。さて、彼等は、幅四尺ばかりの鼠色絹を八ツに切り、何ならん蚯蚓の如き文字を朱墨にて書き記し、此家の門口に張り附け、始め衣類を剝取りたる曲者八人を大勢にて捕へ、鼻をこすり、手足を漬し、はりとなし、其の額に何をかつけ、一人に四人づゝ守りのものを添えおき、時々鼻をこすりて泣かする様は、悪を罪する處刑と知られて、おかしくも亦心地よくこそ覺えけり。それより本船の番人として、大勢を遣はしたる様なりしが、四人には百人ほど附添ひ、着物も元の着物を

着せ、柳行李も取返し、附添人代るゝ、四人の手足をさすり、又團子を出して食はしむ。彼是する内日も暮れしに、皮にて蒲團の如く作りたる大さ一丈に八尺ほどの夜具四枚を出して寝につかじめ、夜中も松火を焚き、且つ手足を按摩してねさせなごしつゝ、すべて漂流の容をして怖れず安堵せしむる様子なるは、質朴にして愛すべきの至りなりき。されば、一同は今朝八人の曲者に衣類を褫がれし時の憂目も、今は何へか失せはて、唯愉快を感ずるばかりとなりぬ。

かくて此所に一夜を明し、又里正體のもの五人、村民二百人はかり來りて、又おかしきをぞなしたりける。そは長さ三間幅九尺厚さ四五寸ほどの一枚板に、漂客一人づゝを乗せ、大勢にてかき行く様は、田舎祭禮の神輿の渡御に異ならず。おかのみならず、過ぎ行く村々、到る所に、酒團子など饗して、數多の見物人、兩側に立並び、いとめづらしけり

見つめたる様は、なかくにおかしかりき。

さて村々の間は田圃相接し、まゝ色黒き松の木及び茶の木を生ひ茂れり。之を眺めつゝ、肩上の舟にて十里餘も過ぎ、七ツ時（後の午）すぎに、五ヶ村めに達したり。此村は稍大村にて、家作の様も見苦しからず。されど屋根は大むね萱おきなり。此村に一宿せしが、其家宅は奥行詳かならされども、間口五六十間もあるべく、屋内悉く皮を敷き、數個の椽臺をまつらひ、其上に皮十枚ほども敷きかさねて、之に一同をば坐せしめたり。四方は金襴の幕を打ち、其外家内には鼠色地に紅さ模様ある唐木綿の幕を張り、またも酒と團子の饗應をぞなしたりける。其の酒は三年酒の如くにて、色は濃けれど、味甘きに酸を帯ひて、飲むに堪ふべからず。又肴も出しけれども、惡臭ありて食ふに堪へざるものなり。かくて翌日早朝になりければ、彼國の官人と覺しきもの二人我箱根の

笠駕籠の如く最も精巧の乗物に乗りたるが、従者三十人ほどを従へ來り、漂客に向ひて問ふ所あれども、更に解せざりしに萬國地圖を出して示し、ゆゑ日本と記せる所をさしたりければ、彼等は打領き、何をか考ふるやうなりしが、暫くありて従者に命じ、皮にて作れる長さ五六尺の長持の中より、大きな饅頭やうのものを取出して、此方のものに三ツづゝ與へたり。此亦惡臭甚しくして食ふに堪ふべからされど、全く口にせざらんも無禮なるべしと思ひ、只一つを四人にて食ひ、残りには手も觸れざりしに、彼等は大笑へり。さて後ち二人の官人は此の地の里正に何事をか命じつゝ、またもどの駕籠に打乗り、此方に一禮してぞまかり歸りぬ。其後は、さきの板に乗せられて、昨日の如く宿送りせらるゝと三十日程にて、國都ともおほしき處に着きにけり。其の地の入口には伊勢國宮川ほごの大川ありて、船にて渡り、それより町家を十四

五町すきて又川あり。此川に渡せる石橋は長さ二十間ほゞの一枚石に、水ぬき七ヶ所を穿てるものにて、此處を過れば繁華の町家二十町計りありて、其次は即ち城の入口なり。城は山に據り築きたるものにて特に高く、大なる石にて積める石垣のみの處五十町ほゞを過れば萱ぶきにて大なる役所と思はるゝ建物見えたり。一同此所まで達するや、大砲を打ちしにぞ、四人は大に驚き、其日は耳も聞えずなりぬ。さて此所にて板より卸されしも、痛く驚きたる故にや、歩行もならざりしが送り來れる人々は常に聞きなれをるためか少しも感せぬやうにて、四人のさまを見るより大に笑ひて、二人づゝにて手を引きつゝ扶け行きたり。そも此所は、タイロン國の都にて、近比コクセンヤの切り從へたる國なりと語りぬ。

これより石と土にて作れる大なる圓き門を過ぎ往けは、又同じ形に

大石をほりぬきたる門ありて扉も石なり。すべて三つの門ありて、いづれも兩側に番所あり。此内に入れば、瓦ぶきの館所々に見えたり。さて一同は殘らず切石じきたる大庭に出されしが、其前には、美々しき種々の織物を着したる高官三人三脚の曲ろくに乗り前には、鎧着たるもの四人、從ひ又幕の外に拔身の鎗長刀を執りたる數人警固せしが、鎗長刀どもに日本の品とは異りて、白めの金色にて光りまほゆきばかりなれど、此は只おどしばかりにて、更に切るべしとは見えざりけり。此處にて唐紙三枚を出せるゆゑ、何れにも日本と書きければ暫くありて之を曲録の人に一枚づゝ奉りけるに、三人共に手をひろけて廣くあけ、次て列座の人々亦手を上げたり。此所作は、前に地圖にて、日本を示せるときにも見しことなるが、如何なる作法なるにや、其の意更に解すべからず。此方の心には、おかしきを思はれける。

さきに端船を打破りたる八人の兇賊を、此所に引き出しけるが、又もや鼻をこすりて泣かせ、且つ朱ぬりの太き棍棒にて一人づゝ撲ちしに、三人までは息絶えたり。昔は我等を苦しめたる曲者ながら、今目前にてみすゝ、此酷刑に行はるゝと、いかて見るに忍ぶべき。せめては残る五人を助けんと、其旨を官人に聞えければ、も言語通せされば、五人の罪囚を指し、拜首の様をなせば、三官より命ずる所ありて撲つを止め、五人の囚徒をして、かはるゝ、漂客四人の股間をくゞらせ、又三官の股間をもくゞらせ、又々鼻をこすり、裸體にして三囚の屍を片付させしが了りて、幕を引き、三官いづれも奥の方に入りぬ。

それよりは城を下り町家に宿り、椽臺の上に皮と毛鹿を敷き、四方へ金襴の幕を張りたる中におかれ、日々饗應にあづかりけり。其の膳部は、一汁五菜二汁七菜は日本に同じく、風味は殊に口に適し、日本の諸白

の如き風味の酒も毎日三度づゝ賜はり、其外米一石六斗と錢は毎日官より給せられしが、錢の内にはわが寛永通寶も見えたり。湯は日に三回づゝ大桶にてつかひ、何の不自由もなく四十日はかり逗留せしが、毎日異風なる此方のものを見んとて、公子夫人の如き人々絶間なく入り代り立ち代り来て、皆々大笑を催す。且つ婦人小兒の來り觀るものは、側近く寄りて菓子等を投げ與へ、全く此方の四人をば玩弄のために伺ひおける、猿猴鸚鵡なんどのやうに慰みにする心得さまは、いと面悪くあるなれど、異域他境に漂着し、哀を乞ふ身の悲しさは、亦如何にもせんすべなく、唯恥を忍びて、を月日を過しける。此の如く日に日に食物を投げ與ふるもの、其數極めて多ければ、四人の口に食ひつくすべくもあらず、其儘のこしおくに、盗みとりて之を食ひ、監視人に見付られ、例の如くに鼻をこすられたる上、額に朱墨にて何やらん書きつけられ、門前

に三日間づゝさらさるゝもの妙なからず。之を見れば繋かれをる猿にひとしきものゝ目にもいと氣の毒にぞ見えにける。

此處に滞在中、四人の内一人病にかゝり容體輕からぬ風なりしかば、醫師四五人つき添ひ絶へず煎藥を與へ晝夜の看護人三十人はかりつけおかれて、最も懇切の療養にあづかりしかとも、藥石其の効なく遂に鬼籍に上りければ、厚き禮を以て其の地に葬られたり。其の葬式のあらましを語らんに、棺槨ともに甚た美麗なるものにて、棺になきがらをおさめて後朱を一杯に盛りたり。さて野邊の送りには上下數多の官人を始めとして、市中の四民其の數數千人。引導には百五十人計りの僧と一人の大和尚、威儀正しく立並びて讀經の聲絶間なし。殊に此方の三人は例の板輿に乗りて送りしが、國王の菩提所とも覺しき大寺の内、いと丁寧に埋葬の式を行ひ、門前に朱墨もて日本人と大書したる

大板を建て、其の標としたり。かくて後一七日の間は、男女老若群集して、參詣するもの夥しく、其の國の大臣なとの、死して國葬の典を擧ぐるも、これにはまさじと思はれて、あとに残りし三人もいと面目の心地せり。

さて亡き人の四十九日を過ぎぬれば、三人は此地を出發して、こゝに二日彼處に三日と逗留しつゝ、百日あまりも費やして、此國の境を出離れたり。それより馬にて二十里ばかりを過ぎし程に、路坂險じき山道にかゝり、又板輿に打乗りて五十餘日進みしに、始めて平野に出で、さてあまたの城下を過ぎて、ニリウ井川といふ大河あり。川幅五里半ほどありて、南岸に幅五六里の河原あり。此川を越す日は未明に出發し、翌日夜の五ツ時（今午時）過に至りて、やうやく彼岸の一驛に着きにけり。此川は最もけわじき急流にて、水聲怒號、高さ四五尺ほとつゝの泡沫幾

百塊となく湧きかへれり。されば舟にて此流を横ぎるときは、今や覆らんと思はれて、氣も心も身にそはず、たそろしなんぞ言はんも愚なり。さてやうくにして渡りはてぬれば、見渡すかきり平野にして、村里相連り田圃相接して、風光最も佳なり。此の平地に出で、より、急ぎもせざりければ、九十日はかりを費やして、とある港に出でぬ。それより船にのりて、又も五十日程を経て、始めて清國の福州といふ地に着船したり。

福州に着きければ、前の島國とは形勢いと異りて、目に觸るゝ所日本の景色に彷彿たるもの尠なからず。これよりは、七八十人の送り人と二三人の醫師つき添ひ、宿驛毎に山海の珍味を饗せられ、日數大凡百五十日はかりにて、二月の下旬やうやく南京の都につきにける。路すがら見えたる所の城は、其數百にも餘りぬべく、何れも結構宏壯にして、其

の中、天守閣と覺しきは、十四五ヶ所も見受けたり。其の外樓櫓の數は到る所に多くして、一々記憶するに違あらざりき。さて、途中には數々大名の行列に行き違ひけるが、都て日本とは事變りて、先拂といふをなく、鎗長刀類は少しも携へず、種々の幟を樹て、笛大鼓、其他の鳴物のおかしき拍子にて進み行けり。就中公子と覺しきものは、すべて輿に乗りたりけるが、其の輿は朱塗、黒塗等さまざまにして、製作殊に美々しきを、扛夫十六人はどにてかき、牛車はさらに見當らず。從卒は多く、騎馬にて前後を警衛せり。さてこなれた三人の道中は、常に何やら文字を書きたる絹の幟を一人に一本つゝ前に押し立て、通りけるが、宿驛に休息する時は、見物人の群集夥し。道中にも所によりては、見物人のために通行を妨げらるゝこと屢々なりき。然るに、其の見物人は、何れも漂客の装束を見て、笑を含まざるなく、特に婦人小兒は、聲高らかに笑ひ、

れり。然るに此方の目には、彼等の風俗こそいと異様に見えて、なかなかにおかしかりき。

清は大國なれば、其土地は萬分の一をも踏ますして、福州より南京の都に著きけるが、都の入口十餘里は、皆町つゞきにてぞありける。其他は如何なる形勢やらん、少しも見及ばざりき。又此所に大なる社殿四五ヶ所ありて、何れも長さ二百四十間計もあるべく、詣つるものいと繁く、軒下には種々なる雜貨の見世を張りたり。又宇治橋の如き橋にて、らんかんまで朱塗高蒔繪となし、外の家作も朱塗なるもの多く、人の座臥する所は悉く敷石にて椅子寢臺を設けたり。是しかしながら町家の様に、城内の模様は如何ならん、見るに由なくて止みにき。

南京に着してより十四五日は休息し、其後役所に罷出づべき旨申來りしかば、翌朝役人同道にてゆきけるに、町役人と思はるゝ者、日本語に

て三人の生國出帆の月日等を尋問するゆゑ、志州鳥羽の者にて、去年九月出帆せるをより、タイワンに漂着して、本船端船ともすべて打破り、釘金物類を取られたるを、まて具に答へければ、其終始を役人中へ申し傳へて、一々書記したり。其後日本語の清人の談によれば、前の國へ吟味の役人大勢往かれたるが定めて、前に船を打破り衣類をはぎ取りたる八人の賊を罪に行はるべしとなり。此役所より金欄三巻毛氈三百枚幅五寸長三寸は、この板銀三枚を三人に賜りしかば、旅宿に歸りて此板銀を錢に易へたるに、銀一枚は錢六百文つゝとなれり。

此處に滞在中の食膳は、一汁七菜の鯉の刺身、鮎の焼びたしの汁、鱸の田樂等を給せらる。すべて鯉鮎は多く産して、海魚は少し。酒も度々給せられ、其度毎に吸物五つ程、肴六つ七つ程を出し、酒宴の後に菓子饅頭、羊羹等を給せられけるが、此等の費用はすべて役所より給せられ

けり。とうふは日本の一丁半ほどの價錢二文づゝのよしにて、こんにやく山芋等其外青物類は日本より下直なるやうなり。毛氈は十枚にて板銀一枚の賣買直段のよしなり。さて日本に渡りしとありといふ清人日々五十人程づつ詰めをり、酒宴を催し、最も懇切のもてなしをつくされ、殊に言語も少しく通するにぞ、一時は異郷にある憂を忘るゝこともありき。かく朝夕滋味つよき食膳のみにて、後には口に飽きたれば、麥飯を所望せしに、麥は更に無しとて蕎麥切を與へられけるに、日本のとは異りて甚だ太く、且つ風味もあしくして、多くは食ふに堪へざるものなりき。而して常に毛せん三枚づゝの上に乗せしめられ、且つ毎日人參計り煎じたるを服せしめられたる故か、大に逆上せしかば、これをかくと斷りしに、醫師三人來りて、他の藥を與へければ、始めて逆上も止みけり。

十二月廿五日、役所より表白ぬめ裏紗綾の小袖二つ、白紗綾五巻白綸子五巻、白ちりめん五巻、飛紗綾の両面羽おり一枚、帯一筋づゝ三人へ賜はりぬ。着物は日本仕立となし、地はふどりの如き品なりき。さきに、福州にて、緋ちりめん綿入三つ宛、同じく單物三つ宛、狸々緋の羽おり三つ宛、又タイワン國にて毛せんを着物、金らんの羽おりなど賜はりけるが、此は皆彼地の仕立なりしゆゑ、着用もせずして返納したりとなり。かくて、年も暮れて大晦日の晩になりぬ。若し家郷にあるならば、餅つき、煤はきの仕事も終り、家内打寄りて、舊年を送るべきに、幾千里といふことを知らぬ異國にて年を送るゝ、妻子は我を待ちつゝ、如何にして如何なる年をおくるならん、定めて立膳据ゑて、此方の無事を祈るなるべしとは、三人年の暮に臨みてひとしく故郷を思ふ心なり。さて此國にては、貸賣のとなきにや、大晦日の夜は掛取りに歩く者として、一人も

なく、遠近に起る鳴物の音は歌の如くに聞え、琴を弾し或は伽羅を焚く家もあり、東家西隣酒宴の催し盛んにて、市中は祭日の賑ひの如し。此夜日本に渡りしとある清人十四五人にて、三漂客を主賓とし、盛んに宴を張りて饗應せしが先づ大なる蠟燭を三十ヶ所程にとり、皆々の持ち來れる大島臺、小島臺、鶴龜の作り物、或は梅に水仙、其外種々の思ひ付きすべて百四十餘を一面に陳ね、美酒佳肴にて交るゝ興をすゝめ、菓子や饗し、それより酔ひて歌ひ舞ひ踊るを、其拍子は少しも解せざるも、かくまで厚き待遇を受くる情けには、三人の愁も少しは慰みぬる心地せり。此まで打續きての宴會に、三人は最も疲勞したるに、又も今夜の盛宴にあづかりたれば、杯酒に堪かねて霄の間より睡氣を催し、山なす嘉肴珍味には目もくれざるに、清人一同は終夜盛んに諷ひ舞ひ、日出るところに及びて始めて皆歸り去りにけり。

明けは卯年の春三ヶ日の食事は、朝は團子にて晝は粥なり。市中の形況は家毎に戸を閉ぢ、四日めよりは戸を開き常の業を營むさま、ほゞ我が國元三の儀に似たり。さて一月もすぎ二月三日となりけるに、此日は何事やらん物詣する人多く見え、市中所々にて、男女打交り舞ひ踊るもあり、酒宴を張りて樂みあへるものと多かりき。

かくて三月廿三日といふ日になりぬ。今日こそは三人の漂流者がめでたく歸國の途に就く日なりければ、朝またきより兎角の支度など取り急ぎしに、やがて時刻となりぬれば、數多の官人に誘はれて旅宿を立出づるに、旅宿にては、亭主を始め男女十八九人、下人四五十人は、港まで送り來り、別れのぞみては、誠に離れがたき様にて、一同に涙を流しなき悲しみけるにぞ、三人も今日の首途のうれしさものから、猶諸共に涙にくれ思はず別れを惜みけり。如何なる前因のありしにや、日本

のはてより遠き唐土に客となり、肉身も及ばぬ厚きなさを受けし、かくまで思はるゝと、不思議といふの外なかりけり。

出帆にのぞみ、國王より巻物三十卷ヅ、猩々緋三十卷ヅ、長毛氈唐紙の類品々と六寸四方の板銀に文字を彫り眞紅の總をつけたるものを各に賜はりしが、こは船中の切手のよしにて、首にかけおく様命せられければ皆々命のまゝにして乗船し海上恙なく、四月十九日といふに肥前の國長崎港に着船したり。さて其地の奉行所にて取調べを受け、清國にて贈られたる諸物品は悉く取り上げられ、船中切手の代りには白銀三枚づゝを賜はりぬ。其他の巻物等は長崎を立ち去るとき、鳥羽役人のすゝめにて、長き道中に物貨の携帶は難儀なるべしとて、悉く之を賣り拂ひ、郷國への土産として、唯少しばかりを残して携へ歸りけることはをしぬ。

かくて、五月廿五日に至りて、長崎奉行所よりは、鳥羽の役人と三人のものゝ親類の内二人づゝ受取として來るべきよしの飛脚ありければ、三十餘日の後、鳥羽より役人白井金右衛門外二人と、親族のもの六七人長崎に着したり。是に於て皆それゝへ引渡されければ、直に長崎を出發し、海陸恙なく七月廿三日の夕つがた、故郷鳥羽にぞ着しける。然るに三人は先づ役所に召出され、以後は生涯船棄の渡世を爲すべからざる旨嚴重に達せられたり。さて始めて各歸宅を許されしが、初め乗組六人の内二人は海上にて渴死し、一人はタイワン國にて病死し、殘る三人船頭小平次、水主和田村吉右衛門三ヶ所村權八共に安着なしければ、うとんけの咲きしにまさる珍事なりとて、親類縁者打集り、嬉し涙に悦びあひ諸人一同大音あけて幸運をぞ祝しける。